

---

# ようじょ注意報

柚木あづさ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

よつじょ 注意報

### 【Zマーク】

Z8094F

### 【作者名】

柚木あずむ

### 【あらすじ】

“お兄ちゃん”と会えずに泣きじゃくる、半分迷子の女の子と田舎つた。美幼女を泣かせるとは……許せんッ！

タバコを買いに行く道中のことだった。

慣れた道のりだ。小汚い景色に心動かされるわけもなく、機械のように足を進めていた俺は、電柱に身を預けるようにしてたたずむ少女に目を奪われた。

まるで美術展の絵画。こぼれあちるブロンンドの波が白いワンピー  
スに映え、うつむいて地面を蹴るといついじけた仕草が少女性を高  
めている。道端に転がる空き缶でさえ、彼女の美しさを際立てるた  
めに配置されているようにしか思えなかつた。

年は、小学校に入学して間もない、といったくらいか。いや、見  
たところ外人のようだし、もつと若いのかもしねり。

右良し、左良し。通行人は他にいない。思わず小さなガツツポー  
ズが出てしまつたのは気のせいだ。困っている女の子に声をかける  
にもこういった苦労をしなければならないとは。悲しい日本の現実  
がそこにある。

安全神話の崩壊、と人は言つ。性善説などあざ笑うかのごとく、  
昨今は非情な世の中になつてしまつた。いい年した男が幼い少女に  
心動かされるなど、まして声をかけるなどあつてはならないと言わ  
んばかりの怒号が飛び交う。口リコンの何が悪ツ……ではなく、こ  
れはただの親切心。しかし、それすらも警察の御厄介になるような  
事態を引き起こさないとも限らないのだ。寂しい世の中だよなあ、  
まつたく。ま、防衛策をとるに越したことはないつづ一わけです。  
あたりに人気のないことを確認すると、すすすと少女に忍び寄  
る。不審者ではない。ただの善人だ。

「ど、どうしたのこんなところで」

声に反応し、彼女が顔を上げる。遠田に見て予想はしていたが。  
正直、これほどとは。

フランス人形のような真っ白な肌の上に、愛らしいパーツが見事

なバランスでおさまっている。大きな緑色の瞳は潤み、きらきらと輝いて見えた。

しばらくは不思議そうに口チラを見ていた彼女だったが、突然ボロボロと大粒の涙をこぼし…… ちょ、泣かれるのは困る！

右見て、左見て、よし！ 人はいない！

これはいじめっ子のようで居心地が悪いからであつて、叫び声をあげられては困るような下心があるからというわけではない。断じて、ない。

「だ、大丈夫？ もしかして迷子？」

「ちが……う、もんつ！ 家に、いないん、だ……もんつ」

滴り落ちる涙を白く細い手ですくいながら、必死で言葉を連ねていいく。

「バイト先も、学校も、コンビニもつ。行くつて、ちゃんと、書いて、るのに！」

女の子は、羊のストラップがついているだけのシンプルな携帯をつきつけてきた。ストラップはともかく、子供がもつにしては無想像というか、可愛げのない携帯だ。最近の子供携帯つーとたまごつちのようなのとか、レゴブロックで作つたみたいなカラフルなやつとかのイメージがあるけど。お母さんから借りてきたかな？ 彼女が話しやすいようにその場にしゃがみ込んだ。

「誰を探しているの？」

しゃくりあげる姿が実に可愛らしい。

「……お兄ちゃん」

あどけない声に、人の親切を疑わぬ純粋な心が垣間見える。

「お兄ちゃんはどこに住んでる？」

涙を隠そうとするしぐさの、なんと、なんといじらしさことどう。う。うはあ。

「マンション。1人で住んでる。私、会いに来たの」

こんな小さな子が来ると分かつていて、家を空けるか、フツー。自分なら……絶対にそんなことはしない。断言できる。幼女を泣か

せるなど言語道断、紳士にあるまじき行為！

『氣づいた時には彼女に向かつて手を伸ばしていた。

「ちょっとその携帯、貸してくれるかな？ そのお兄ちゃんに話をつけてあげるから

「本当？」

黙つて頷く。

じいと見つめる彼女の瞳にはキラキラと輝く星が見えた。次第に涙で赤らんでいた彼女のほほが、柔らかい色に染まりなおしていく。

「お兄ちゃん、ありがと！」

舌つたらずな言葉の波にエローがかかる。脳の奥の方がジンとしびれる。とろけるような感覚に体中の力が抜けていきそうになる。かろうじて姿勢を保ちながら視線を戻すと、そこにははじけるような笑顔。

何かが心臓を的確に貫いていった。

即死コンボをくらいほとんど白紙となつた頭の中に、「生きていって良かつた」という言葉がぼんやりと浮かんだ。

彼女は不慣れな様子で携帯をいじると、何の躊躇も見せずポンと預けてきた。画面には携帯の番号が表示されている。

「これがね、お兄ちゃん……あっちのお兄ちゃんの番号」

「あ、うん。このお兄ちゃんにまかせて」

ホール音を右耳に、彼女の可愛らしい声を左耳に聞きながら相手の男を待つ。優しいお兄ちゃん大好き、とか……この場で死んでも構わない。

ふつと音が鳴る。

先手必勝。

こんな小さな子をほつぱつて何やつてんだ、と怒鳴りつけようと口を開けた時だった。

『さつきからしつけんだよー、メリーさんとかふざけんのもいい加減にしやがれ！』

若い男の声だった。

鼓膜を割らんとする勢いの罵声が耳の中に渦巻く。用意していた言葉を吐くことも忘れて、その場に硬直するしかなかつた。  
「ふつつ。

つー、つー。

機械音が遠くに鳴る。メリーサン、だつて？ こんな小さな子が怒鳴り散らすような相手にイタズラ……まさか。いや、しかし。携帯を握っていた手が垂れ下がる。それを待つていたかのように、元通り、背後で待つていた彼女の愛らしい声が耳をくすぐつた。

「やっぱり、だめだつた？ でも……お兄ちゃんはあつちのお兄ちゃんとは違つ、よね？」

彼女が小さな白い手を伸ばしてくるのが見ずとも分かつた。携帯を固く握りしめていた俺の指をほじき、彼女の携帯を取り返していく。

触れられたところから凍つていきそつなほどに、彼女の指はひどく冷たかった。

メリーサンの電話。

ランドセルを背負つていた頃、聞いたことがある。

メリーサンを名乗る少女が電話をかけてきて居場所を伝えてくるという。何度も何度もかかるくる電話。徐々に縮まる“メリーサン”との距離。そして。

ジーンズの尻ポケットに入っていた携帯がブルブルと震えた。  
そつと抜き取り、耳に当てる。

「私、メリーサン。今、あなたの後ろにいるの」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8094f/>

---

ようじょ注意報

2010年10月8日13時47分発行